

五四時期中国における大同思想の興起とその意義

森 川 裕 貫

はじめに

『礼記』礼運篇の記載に基づく大同思想は、長い中国の歴史のなかで一定の位置を占めていたが、その存在感がわかにか高まったのは清末になってのことだと考えられる。⁽¹⁾ 実際には清末から中華民国時期にかけて、多くの論者が大同という語を使用しているのを容易に目にすることができる。

それでは、大同という語が意味する内容はどういったものか、それを説明するのに当時好んで引かれたのが、礼運篇の次の一節である。

大道之行也、天下為公、選賢与能、講信脩睦。故人、不独親其親、不独子其子、使老有所終、壮有所用、幼有所長、矜寡孤独廢疾者皆有所養。男有分、女有婦。貨惡其棄於地也、不必藏於己。力惡其不出於身也、不必為己。是故謀閉而不興、盜竊亂賊而不作。故外戶而不閉。是謂大同（大道の行われる世には、天下は万人のものとしてされる。人々は賢者能者を選挙して官職に当たらせ、手段を尽くして相互の信賴親睦を深める。だから人々は、それ

それぞれの父母のみを父母とせず、それぞれの子のみを子とせず、老人には安んじて身を終えさせ、壮者には十分に仕事をさせ、幼少の者はのびのびと成長させ、寡夫・寡婦・親のいない子・年老いて配偶者や子を持たない人・身体の不自由な人に苦勞なく生活させ、男性には職分を持たせ、女性にはふさわしい夫をもたせる。財貨が無駄に捨てられることを人々は憎むが、しかし財貨を独り占めにはしない。勞力が出し惜しみされることを人々は憎むが、しかし自分のためにのみ勞力を用いはいはしない。みなこうした心がけであるから、私利私欲に基づく計略は外に用いられる機会がなく、窃盜や暴力の沙汰もなく、誰も家の戸を閉めない。これを大同の世という⁽²⁾。

中国近現代に頻出する大同という語も、ここに掲げられている理念を基本的には反映している。しかしあくまで基本的になのであって、国外から流入していた様々な思潮の影響もあり、その内容は実際には相当複雑化していた。

たとえば、大同思想隆盛を代表する著作の一つである康有為の『大同書』は、最終的に、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸部から構成される大部な書物となり、国内外の政治・社会・教育・家族など幅広い分野にわたる記述に満ちている。『大同書』の豊富な内容は礼運篇を出発点とするといえ、康有為の吸収した国内外の知見が随所にちりばめられており、その記述は礼運篇の範囲に収まるものでは到底ない⁽³⁾。

内容の複雑化は、相互に対立しかねない見解をとくに生み出した。清末の雑誌『大同報』と『新世紀』が提示した大同がその事例として挙げられる。

一九〇七年、東京で創刊された『大同報』の中心となったのは、恒鈞や烏沢声らといった満洲旗人である。彼らは満人と漢人の対立に代表される清朝統治下の諸民族間対立を緩和するべく、満・漢・蒙・回・藏を「一大国民」とすることを主張した。そしてこの主張を大同という語によって展開した。満・漢・蒙・回・藏の別を消滅させようとし

たのである。彼らはこうした活動により、動揺する清朝の統治を安定させようと目指したのである。⁽⁴⁾

同じ一九〇七年、パリで李石曾や呉稚暉らにより創刊された雑誌『新世紀』は、やはり大同の実現を主張していた。だが、よく知られているように、『新世紀』は無政府主義の立場から、清朝はもちろん最終的には国家の消滅すら目指しており、その掲げる大同は清朝統治の安定を企図する『大同報』のそれとは大きく立場を異にしていた。⁽⁵⁾

このように多種多様な内実を含み込む大同は、大きな広がりのある概念だったと言えるだろう。当事者にもそのように認識されていたのであって、たとえば『大同書』を紹介する際、梁啓超は本稿冒頭でも掲げた礼運篇の一節を引きつつ、今日の言葉でその内容を解釈すると、「民治主義」「国際連合主義」「児童公育主義」「老病保健主義」「共產主義」「労働神聖主義」を含んでいると説明している。⁽⁶⁾大同は、論者の意図にに応じて様々な意味を盛り込むことのできる便利な言葉だったのである。

しかしこの便利さは、融通無碍と紙一重でもあった。あまり重要な意味を帯びていないものも含め様々な大同が氾濫し、⁽⁷⁾前述したような相互に対立しかねない大同も出現するようになった。また、対立や矛盾にはいたらないまでも、大同の指し示すところが曖昧なために、一個人のなかで結局のところどのような意味で大同という用語が使用されているのか、明確ではない場合も見られる。そのため、大同という用語・観念に着目して研究を進めるのは容易ではない。とはいえ、この融通無碍さや曖昧さが、大同を様々な新しい概念と結びつけてその存在感を高め、多くの読者の目に触れたという事実も否定できない。⁽⁸⁾したがって、大同という用語・観念に着目して研究を進めることには大きな意義があると言えよう。

これら様々な大同については、すでに言及した康有為の大同思想のほかにも孫文の大同思想など多方面にわたる研究成果が蓄積されてきている。⁽⁹⁾だが、多種多様な内容を包摂する中国近現代の大同の射程は、これまでの研究ではあ

まり重視されてこなかった方面にも伸びている。本稿ではそのなかから、五四運動前後に見られた大同の高まりについて注目したい。

以下で述べるように、当該時期における大同思想への関心を高めた一要因として、第一次世界大戦を契機として生じた国際協調の気運と、その成果の一つとしての国際連盟の成立を挙げることができる⁽¹⁰⁾。このようにして出現した国際協調論的大同思想の考察は、複雑な相貌をもつ中国近現代の大同像を把握する上で重要な意味を有するであろう。本稿では以下その詳細を検討するために、まずは当時の中国の思想状況を確認しておきたい。

一 第一次世界大戦以降の中国の思潮

一九一四年七月に勃発した第一次世界大戦に対し、中華民国は当初中立を宣言する。しかし国際情勢の推移は中国が中立を維持し続けることを許さず、大戦に参戦するの否か、この問題をめぐって中華民国は大いに紛糾することとなった。北京政府の実力者であった段祺瑞國務総理が、協商国の側に立ちドイツとの開戦に積極的であったのに対して、黎元洪大總統や国会はそれに反対し、国論が二分されたのである。結局のところ、段祺瑞が一九一七年三月にドイツとの国交断交を強行し、八月にはドイツとオーストリアに宣戦布告を行った⁽¹¹⁾。当初は反対論が根強かったとはいえ、参戦の結果、戦勝国の一員に連なったことは、中国にとって一つの慶事であり、戦勝国になったという事実を基礎に、日本が大戦中にドイツから獲得した山東利権の回収を求める気運が高まった。

こうした気運を高めるのに与って力があつたのが、一九一八年一月、アメリカ大統領ウィルソンが連邦議会で行った演説である。秘密外交の廃止、軍備の縮小、民族自決の一部承認、国際平和機構創設など多岐にわたる内容をもつ

この演説が、十四箇条の平和原則として知られるようになったことについては贅言を要しまい。この原則は当初、中国において惜しみない称賛を受けた。

たとえば中国を代表する雑誌の一つであった『新青年』を率い、北京大学文科学長も務めていた著名な知識人陳独秀は、大戦勝利を機に創刊した週刊誌『每週評論』の創刊の辞で、ウィルソンの演説を「光明正大」と評し、ウィルソンを「世界で一番の好人物」と褒め称えた⁽¹²⁾。さらに陳独秀は、ウィルソンの主張を、「各国が強権で他国の平等自由を侵害することを許さない」という主義と、「各国政府が強権で民衆の平等自由を侵害することを許さない」という主義から構成されると明快に整理し、賛同を示した。同じ文章で陳独秀は、第一次世界大戦をこの二つの主義と密接に関わる「公理」が、「強権」に勝利した戦争であるとも強調し、『每週評論』の趣旨は「主張公理、反対強権」であると表明している。武力による侵害を伴う「強権」によってではなく、「公理」によって各国間の関係を基礎づけるようとする姿勢からは、戦争を排した国際協調への期待を見て取れる。

だが、期待は急速にしぼんでいった。一九一九年一月より開催されたパリ講和会議では、中国が当然に回収すると予期された山東利権が、日本の反対により回収困難に陥った。しかも日本の挙動は、イギリスやフランスの支持を受けるものであった。この事態は陳独秀には到底許容できないものであり、「パリ講和会議では、各国いずれも自国の権利を重んじている。公理や、永久の和平や、ウィルソン大統領の十四箇条宣言といったことは、すべて一文の値打ちもない絵空事となってしまう」と慨嘆している⁽¹³⁾。「現在の世界で一番の好人物」としたウィルソンについても、「ウィルソン大統領の平和に関する意見を示した十四箇条は、現在でもその過半が実行できない理想であるから、われわれは彼を「威大炮（大はらふきウィルソン）」と呼ぶこともできよう」と揶揄するにいたった⁽¹⁴⁾。なお、こうした所感 は都市部の学生を中心に広く共有されたものであり、それが五四運動を引き起こしたことはよく知られるとおり

である。

「公理」に大きな期待を寄せていた陳独秀は、失望と怒りの渦巻くなか、「二個人一民族が自衛する強い力を持たず、単に公理が大いに盛んとなることを望み、他人の慈悲と助力という恩恵に頼ってようやく生存できるというならば、これは懦弱で無恥で自立できない奴隷と等しい」と「公理」への依拠に留保を示すにいたった。¹⁵⁾代わって必要なのは、「公理はそれ自身では力を十分に發揮できず、強い力での擁護が必要なものと覚悟」することだった。「公理」は力で支えられなければならないのである。こののち陳独秀は、台頭しつつあったソヴィエト・ロシアに関心を寄せ中国共産党結党へと進むが、それを促した一因は、期待が裏切られ失望を味わったためだったとみてよいだろう。

より明確に、国際協調への期待を否定する論調も見られた。たとえばのちに政治学者として名を馳せる薩孟武という人物は、第一次世界大戦終結後も各国が軍備の拡張と経済的自立に努めているとした上で、「今日の国際関係は、すべて弱肉強食の世界である。いわゆる世界主義や人道主義は、かの強者が強者を対象として用いるものであって、わが中華の人民は、その眼中にはもとより置かれていないのである」との醒めた見解を示す。「公理」と密接に関連する「世界主義」や「人道主義」は、強者のみが享受できるものであって、中国はそこから疎外されている、そうである以上、中国のような弱国には「自強の義務」があり、強国による侵略を防止するための国防の充実が求められるというのである。¹⁶⁾

陳独秀や薩孟武のような、国際協調に対する懐疑的あるいは批判的まなざしを当時の中国の思潮に見て取ることは容易であり、そうした論調が力を有していたことも確かな事実である。だが、国際協調に対する懐疑や否定ばかりが支配的見解となったのではないという事実にも留意が必要である。国際協調に対する期待や支持は、パリ講和会議を

経た後も依然として強力であり、国際協調を基調とした国際秩序構築に進むべきであると考える人々が存在していたのである。

注目されるのは、こうした人々の一部が、国際協調を基調とした国際秩序構築を、大同思想と結びつけて語っていたことである。そのきっかけを提供したのは、やはりウィルソンによる十四箇条の平和原則の提唱であった。

一一 大同思想と国際連盟

ウィルソンの表明した十四箇条の平和原則に対し、中国国内でいち早く反応した一人が、清末以来活躍を続けていた知識人、梁啓超である。彼はウィルソンの唱えた民族自決の原則に賛同し、中国自身も「外蒙古やチベットを開放して、ウィルソンの考える民族自治自決主義を實行し、その地の人民に自治の機会を多く与えてよいだろう」と、当時の中国の知識人としては積極的な発言をしている¹⁷。

また、やはりウィルソンの提唱した国際平和機構について、それを「国際大同盟」と言い換えた上で、この同盟が強大国による弱小国への政治的野心を抑止するものであるから、中国としても賛成すべきと説いている。そして「国際大同盟」が成功すれば、大同の域に世界が達するとした¹⁸。

国際連盟を儒学の理想、特に大同実現と結びつけるという思考は、梁啓超一人のみに特有だったのではなく、幅広く見られた。たとえば、創立まもない国際連盟において、中国を代表して活躍した外交官、顧維鈞もこうした見解を有していた。

顧維鈞は *China and the League of Nations* と題するパンフレットのなかで、「孔子が初めて教えてくれたのである。

私たちは個別の民族の秩序ある統治に単に満足すべきであるだけでなく、彼が「大同主義」と名付けたところのものの設立を目指さなければならぬのだと。この大同主義とは、文字通りには偉大なコミュニズム、比喩的には「ユートピア主義」、そして実際的には「諸国家による連盟 (a league of nations)」を指しているのである」と孔子の見解を肯定的に紹介した上で、それが国際連盟の構想と共鳴しているという説明を加えている。顧維鈞はさらに続けて、「孔子による君主と人々へのアピールは、彼自身の時代には多くの具体的な成果を生み出せなかったが、彼の理想と原理は世代を超えて生き残り、そして中国の人々の精神に深く植え付けられてきた」のであり、「国際連盟に対する中国の熱狂とその利益に協力しようという心構えは、ゆがむことなく拡大していくだろう」との見通しを示した⁽¹⁹⁾。

英語で執筆されたことから明らかなように、顧維鈞のこの見解は、国際社会とりわけ欧米に向けたアピールとしての意味を強く帯びている。⁽²⁰⁾ 第一次世界大戦の戦勝国に連なりながらも、中国は勝者としての恩恵を享受するどころか、日本との関係で難しい立場に置かれることになった。この苦境を打開するため、顧維鈞は中国が国際連盟の一員として国際協調を担っていく十分な資格を有していることを訴え、その論拠として孔子とその大同主義に言及したの
だろう。

また、著名な法学者で、外交の分野でも活躍した王寵惠も、次のように国際連盟と大同思想を結びつける語りを示していた。

今日、国際連盟問題を研究する会を開く。こうした名義は大変新しいと感じられる。しかし名義は新しいけれども、その主義は中国では非常に古いと感じられる。そもそも世界大同とは我が国で長く伝えられてきた思想である。現在、我が国が国際連盟に賛成しているのは、ウィルソンの主張に賛成しているからでも五大強国のやり方

に賛成しているからでもなく、孔子の大同主義に賛成しているからなのである。我が国はかねてから戦争を喜ばず、だから立派な人は兵士にならないということわざがあり、戦争を好む者は重い刑に処せられるという明快な戒めが存在している。以上から、中国は数千年以前から一種の大同思想を有していたことがわかるだろう。今日の国際連盟とは、我らの主張が成功したに過ぎないものである。以前はまだ一種の主義であったのだが、最近になって実行の時期に入ったのは、思想が一步進んだということである。⁽²⁾

一読して明らかのように、王寵惠の見るところ、世界大同の気運や国際連盟に中国が積極的に呼応すべきなのは、それらが孔子の大同主義と強い親近性を有しているからであって、ウイルソンや五大国の動向は第一義的には必ずしも重要ではない。彼が国際政治の動向を軽視し孔子の大同主義の卓越のみを強調するかのような議論を展開したのは、この講演が活動を開始したばかりの中国国際連盟同志会において行われたためかもしれない。

中国国際連盟同志会は、ウイルソンによる国際連盟創設の提唱、さらにはアメリカ、イギリス、フランスなどで国際連盟の理念に共鳴しそれを支持する運動が活発化したことに触発され、一九一九年に北京で創設された。汪大燮を理事長、蔡元培、熊希齡、林長民、王揖唐を理事、そのほかの会員として陳籙や葉景莘らといった現役外交官、胡適や陶孟和らといった大学教授が名を連ねており、幅広い人士が参加していたことが見て取れる。

同志会はその発起に際し、中国が現在の諸国家のなかで最も古い歴史と最も多くの人口を有することを誇りつつ、「だから、我々は中国に対しても世界に対しても、国際連盟を擁護する重大な責任を負っている」と国際連盟を中国が支えていくべきとの強い決意を示している。そしてこの決意を示す際に、「ここに同志を集めてこの会を設立したのは、国際連盟に対して積極的な主張を行い、他国の同志と気脈を通じて互いに提携し、我が大同の理想を達成せん

と期するためである」と大同の実現をその目標として言及していた。さらに大同について、「中国の政治思想はつとに大同を至善としている。大同は天下一家、つまり国際連盟の完全な段階である。中国の民族は和平を好み戦争を憎みその恩恵に浴することを尊重してきたが、それは数千年来の聖哲の教訓のもたらしたもので、国際連盟の精神ともとりわけ符合する」と説明を加えている。⁽²²⁾

同志会そして王寵恵も、国際連盟、さらには連盟が体现するであろう国際協調と中国の大同との関連を強調している。イェール大学で博士号を取得し、外交総長も務めた経験をもつ王寵恵は、国際情勢にも深く通じていた人物である。また、同志会のほかの人物も、その経歴から国際情勢に明るい人物が少なくなかったと推測される。それにもかかわらず、ウイルソンや諸外国の動向以上に中国に淵源する大同を重視したのは、同志会の活動を広範に展開していくためではなかったか。過半の中国の人々にとってはまだ縁遠いであろうウイルソンらの主張をあえて軽視する一方、中国の歴史的歩みと国際協調との間に高い親和性があることをことさらに強調し、国際連盟に対する人々の積極的な支持を調達しようとしたのではないだろうか。

同志会さらには梁啓超や顧維鈞の以上の言論からは、大同という語・観念が大きな意味を有していたことがわかる。彼らは大同という中国の人々に周知の語に積極的に言及し、それに国際協調的な色づけを施すことで、自身の主張の訴求力を高めようと腐心していたのである。

三 国内秩序論への波及

興味深いのは、国際協調に期待しそれを大同と結びつけて語る議論のなかに、国内秩序のありようにも注意を向け

るものが存在していたことである。ここでは再び、梁啓超の事例を見てみよう。

梁啓超は連邦制度が、「百年來の政治史上の新傾向」となっているとした上で、それを採用するスイス、ドイツ、アメリカ、オーストラリア、カナダ、南アフリカなどは、各邦各州といった小さな単位が本来もっている「主権」を承認しつつ、中央政府と各邦各州の政府という「二重の政府」という形式を成立させており、成功を収めていると考えていた。その上で、「國際連盟がたどる道を論じてみると、スイス、ドイツ、アメリカなどの連邦制度を拡大したものにすぎない」のであり、「部分でできているのだから、全世界でもできないことがあるか」と指摘し、國際連盟の成功をも予見していたのである。⁽²³⁾

ここに見られる連邦制への志向は、やがて連省自治運動へと結実した。連省自治は、一九一〇年代末から一九二〇年代初頭にかけて提唱されたもので、その要点は、各省が「省憲」、つまり省の憲法の制定・公布を実施して自立的に自省の政務を遂行しつつ、各省が連合して連邦制による国家を建設することにあつた。⁽²⁴⁾そしてよく知られているように、この運動は特に湖南省を中心に中国各地で盛り上がりを見せた。

梁啓超もまた、連省自治運動に積極的に参与した一人である。梁啓超は一九二〇年の段階で、「國家の組織はすべて地方を基礎とするものと我々は確信している。だから中央の権限は必要とされる範圍までに制限し、対外的に統一を維持できる程度にとどめる」、「地方自治とは自らが動くものであるべきだと我々は確信している。だから、各地方はすべて自主的に根本法を制定してこれを守るべきであり、國家はそれを承認する必要がある」と、地方自治に親和的な主張をしていたが、一九二一年になると、湖南省督軍趙恒惕の求めに応じて湖南省憲法の大綱を執筆し、また湖南省に侵攻していた直隸派の軍人吳佩孚に連省自治への賛同を求める書簡を送付するなど、連省自治運動を熱心に支持していた。⁽²⁶⁾

連邦制度に関する議論は、中国に元々存在していたものである。⁽²⁷⁾ それが一九二〇年頃から盛り上がり、連省自治運動にまで発展しえたのは、連盟そしてそれが体現する国際協調への期待の高まりがあったからこそであろう。梁啓超はかつて、特にアメリカ型の連邦制度に対して、それが国家間の競争が渦巻く世界にあつて、競争の基本単位である国家を好んで分割するようなものであり、「世界の大勢に逆行し、天演の法則に照らすと、自ら劣敗を求めているものにほかならない」との否定的態度を鮮明にしていた。⁽²⁸⁾ その彼が連省自治の参与にまで踏み込み得たのは、国際協調への期待の高まりがいかに大きかったかを示していよう。

四 大同への懷疑

連省自治運動は、梁啓超のみならず胡適が雑誌『努力週報』で積極的支持の論陣を張るなど多くの知識人が参与し、また陳炯明ら有力軍人も賛同したことで大きなうねりを生み出した。だが、醒めた目でこの運動を眺める人も少なくなかった。その一人が、本稿冒頭に言及した陳独秀である。

中国共産党の指導者となつていた陳独秀は、連省自治運動が「人民の要求から生じたものではなく、湖南、広東、雲南などの省の軍閥の首領から提起されている」、「完全に武人割拠の欲望の上に作られたもので、人民の実際の生活の必要の上に作られたものでは決してない」という状況を反映するもの、つまり「分省割拠、連督割拠」にすぎないとの觀察をしている。⁽²⁹⁾ そこから彼は、「私は、連省自治が現在の中国の政治問題を解決できるとは決して承認しない」と断言した。中国共産党の若き俊英の一人であつた蔡和森もまた陳独秀と同一の論理で連省自治運動を退けている。⁽³⁰⁾ 陳独秀らがこうした批判を展開したのは、党の方針に依拠したからではあるが、⁽³¹⁾ そのような方針が出されたのは、連

省自治運動が実際に「軍閥」の勢力保持の隠れ蓑として利用されることがあったためでもある。⁽³²⁾

こうした立場に身を置く陳独秀は、大同思想についても冷淡な姿勢を示している。陳独秀は大同思想について、「大同主義、世界和平、戦争の根絶、博愛、人類の努力はこうした道に本来は向かうべきなのである」と確かにその意義は認めている。しかし続けて、「いかなる方法が我らをこの道に向かつて歩ませ、この道を遮る障害物を除去させることができるのか、これが最も緊要な問題なのである。こうした方法がないのであれば、ただこれらいくつかの名詞をむなしく叫ぶのみである。強大な民族が叫ぶのであれば、たとえ利益はないにせよ損害を被ることもまたないだろう。しかし、圧迫を受けている弱小民族が叫ぶのであれば、あまりにも身の程知らずの恥ずかしい話であり、恐るべき麻醉薬・睡眠薬のようなものでもある」と述べ、冷や水を浴びせている。⁽³³⁾中国に見られるような「弱小民族」が、大同思想を唱えてみたところで、百害あって一利なしと陳独秀は判断したのだった。

五 国際協調論的大同思想の限界

陳独秀の批判は大同思想全般に向けられたもので、国際協調論的大同思想のみを批判しているのではないだろう。ただし、その批判の論理から国際協調論的大同思想が逃れることは容易ではなかった。

国際協調論的大同思想には、このほかにも限界が存在していた。第一に彼らにとつての大同とは、国家の消滅をただちに訴えるものではなかった。国際協調論的大同思想の目指すのは、主権国家の存在を前提に国際連盟を通じた国際協調を模索していくことであつた。国際連盟とそれが体现する大同に関しては、「大同の段階に到達すれば、国家の区別は本来消滅すべきものである。この観点からすれば、国家の区別を前提とする国際連盟の構造は十分ではな

く、改善を實行する必要がある」との問題提起もなされていたが、こうした点が国際協調論的大同思想の担い手のなかで正面から検討されることはほとんどなかったのである⁽³⁴⁾。

康有為や無政府主義者らの唱える大同の下では、国家の区別はいずれ消滅させなければならない目標として觀念されていた。これに対し、国際協調論的大同思想は、国家の区別の消滅を現実的に実現を目指す目標としては設定し得なかった。比較的高い社会的地位を誇る国際協調論的大同思想の提唱者たちにとって、主権国家の解体は遠い将来の目標にはなり得ても直ちに踏み込む必要はなく、また場合によっては現実離れた無責任な考えと捉えられていたのかもしれない。

第二に民族主義や愛国主義を正面から受け止めていない、あるいはそのように見なされかねない側面が存在していた。陳独秀がウイルソンに失望するにいたった一つの要因は、中国の尊厳がパリ講和会議において踏みにじられたと感じたためであろう。五四運動の勃発は、こうした思いに共感する人々が多かったことを示している。もちろん、国際協調論的大同思想の担い手たちも、民族主義や愛国主義に対して関心がなかったわけではない。よく知られているように、梁啓超はパリ講和会議において、山東問題が中華民国の主権を踏みにじるかたちで推移したことに憤りを感じていた⁽³⁵⁾。国際連盟を大同実現の徴表と捉えていたからといって、手放して礼賛していたわけではないのである。

だが、陳独秀とは異なり、梁啓超は冷静さを失うほどに憤っていたわけではなく、国際連盟に完全に失望してしまつたわけでもない。梁啓超は、「われわれ中国人は一年前、国際連盟に期待すること、はなはだ大げさであった。現在、それに対する失望もまた、大げさなものである」と記す。自身も「大げさ」な「期待」をしていたと認めつつ、しかし失望に向かつてはならないと説いているのである⁽³⁶⁾。

梁啓超がこのように述べた理由は、第一に、連盟は「まず頼るべき乳母」であつたはずのアメリカが参加しないな

ど、誕生当初から多事多難であつたし、このか弱き連盟が「強きをくじき弱きを助ける万能の力」をただちに發揮して國際平和を早急に實現するのは、「人間離れた事業」であつて不可能なためである。第二に連盟は、「氣運に應じて生じた優れたもの」、「この新時代が生み出したもの」、「今後新しい時代を生み出していくことができるもの」であつて、その誕生の日は、「人類全体の最も榮譽ある記念日である」とされるほど晴れがましい存在である。同時に連盟は、「全世界の人類が共同して作り出したものであり、われわれが世界の一個人である以上、われわれの能力を尽くしてその創建、支持、發展に参与しなければならぬ」存在でもある。以上の二点を踏まえると、「連盟の現在の組織は不完全であり、現在の力量は弱いけれども、すべてたいしたことなく、ゆつくりと自然に發展成長させる」というのが正しい態度である。⁽³⁷⁾ 別の言い方をすれば、連盟の限界を認識した上でその發展に寄与しようというのが梁啓超の考えだったのである。

こうした梁啓超の議論は、冷静かつ漸進的なものであると言えるだろう。責任ある立場で政治を担う者にとっては、この議論は参照すべき点が多いはずである。しかし、そうではない立場の者にとっては、中国が保つべき尊厳に十分な配慮が足りない生ぬるい議論であると捉えられたのではないか。

第三に第二の点と関連するが、担い手が限られていたことである。國際協調論的大同思想を提示した梁啓超、顧維鈞、王寵惠らは、いずれも高い社会的地位を有し國際情勢に通じた人々であつた。⁽³⁸⁾ 彼らはいわばエリートのなかのエリートであつて、彼らと同様の高い社会的地位にある人々には、その議論は一定の影響力を持ち得たであろう。だが、彼らエリートが提示する大同は、たとえば当時様々な政治的・社会的運動の先頭に立つようになっていた青年にどれほどの訴求力をもっていたのだろうか。当時、十分な自己を確立していない青年は、急進的な思想や破壊的な衝動に流されやすい傾向を有していた。⁽³⁹⁾ そのような彼らにとって、國際協調論的大同思想はあまりに穩当で徹底さを欠

くと感じられたのではないか。実際、政治的・社会的運動に熱心な学生の過半は、革命運動や無政府主義に見られる過激な言辞に吸引されていったように見える。

ただし、だからといって学生は大同自体に関心がなかったわけではまったくない。具体的事例として、ここでは廢除考試運動というものに着目したい。

廢除考試運動とは、一九一九年、北京大学や北京高等師範学校の学生により提唱されたもので、学校における試験の実施が学生の自由な人格を傷つけているとの認識から、試験を廢止し、学生の自主性を重視して学校教育を実施するよう求めた運動である。この運動の過程で組織された廢除考試研究会は、そのようにすれば大同の世の実現にもつながると主張していた。⁽⁴⁰⁾

こうした主張の中心に位置したのが、北京大学哲学系の学生であった朱謙之である。⁽⁴¹⁾ 朱謙之は無政府主義の影響を受けつつ、それよりもさらに急進的な議論である虚無主義という立場を打ち出した。虚無主義は国家や政府の廢絶を目指しており、その徹底のために既存の秩序すべての解体をも提唱するものである。⁽⁴²⁾ これは前述した国際協調論的大同思想よりもはるかに極端な議論であり、その下で実現が目指される理想の秩序は、それが秩序と呼びうるかたちを取り得るのかすら疑問だといえ、国際協調論のなかで言及される大同とは、自ずと相貌を異にするものであっただろう。

むすびにかえて

朱謙之による虚無主義の提唱は、廢除考試運動が短期間で収束したのと同様、持続することはなかった。あまりに

過激な言論は、大いに耳目を引いたものの、それを継続していく粘り強さには乏しかったのである。ただし、朱謙之が大同思想に対する関心を失ってしまったのかといえ、そのようなことは決してない。

朱謙之は一九二七年に黄埔軍官学校政治教官に就任し、国民革命を支えるための教育に尽力することとなった。黄埔軍官学校では、一九二四年六月の開校の際、孫文が

三民主義、吾党所宗、三民主義は、我が党の指針とするところであり、
以建民国、以進大同。それによって民国を建設し、大同に進む。

咨爾多士、為民前鋒、多くの士よ、民衆の先鋒となり、

夙夜匪懈、主義是從。朝夕怠ることなく、主義に従え。

矢勤矢勇、必信必忠、よく勤めよく勇を奮い、信を守り忠を尽くし、

一心一徳、貫徹始終。心と徳を一つにして、最後まで貫徹せよ。

との訓辞を述べたこともあつてか大同という語が重要視されていたようであり、⁽⁴³⁾朱謙之もまたその教育の過程で大同思想に積極的に触れていた。そしてその成果を『国民革命与世界大同』（一九二七年）、『大同共產主義』（一九二七年）、『到大同的路』（一九二九年）という著作として上梓している。⁽⁴⁴⁾虚無主義から離れた後も、朱謙之は大同思想に對する旺盛な関心を引き続き強く有していたのである。

しかし、この段階での大同は、かつての虚無主義の立場とは相容れないものを含んでいた。たとえば『国民革命与世界大同』において、朱謙之はマルクス派の共產主義を「強権的共產主義」として退ける一方、孫文による民生主義

・共産主義を「和平的共産主義」と呼び、それが「大同世界」の実現に結びつくものと高く評価した。⁽⁴⁵⁾ 虚無主義の下においては、あらゆる政治権力は否定の対象であったのに対し、ここでの大同は、孫文の提示した理念を積極的に称揚し、その政治権力保持を事実上容認するものへと変容していった。かつての朱謙之が見せていた国家や政府の廃絶を目指す熱情は確かに真摯なものではあったが、同時に無軌道なものでもあって、結局のところ政治権力に飲み込まれざるを得なかったかのようである。

孫文による黄埔軍官学校での訓辞は、よく知られているように、こののち三民主義歌、中国国民党歌、そして中華民国国歌の歌詞に採用され、⁽⁴⁶⁾ 今日にいたるまで広く歌い継がれている。その過程で、大同という用語はますます多くの人々に知られていったことだろう。しかし、そのように広まっていく以前、朱謙之の虚無主義的大同思想は、国民党の支配を支えるものへと変容していった。なお、これは朱謙之一人に見られた事例ではない。かつて無政府主義的立場から大同に言及していた呉稚暉も、「三民主義は世界大同にいたる手段である」と言明し、大同と国民党の理念とを不可分のものとして捉えるようになっていた。⁽⁴⁷⁾ 結果として、無政府主義的大同思想が本来もっていた既成の政治権力への抵抗や挑戦といった側面は、失われることになった。

これに対し、国際協調論的大同思想は広がりや欠いたにせよ、その命脈を保ち続けることができたかのように見える。ヴェルサイユ講和会議や満洲事変などにより、国際連盟に対する中国の人々の信頼が損なわれることはあったものの、国際協調に対する期待は消失することなく、⁽⁴⁸⁾ 第二次世界大戦後になると国際連合の下での国際協調実現を訴える主張も珍しいものではなくなった。この一連の過程において、大同に国際協調論的観点から言及する議論は、一ならず見られるものであった。⁽⁴⁹⁾

大同という用語は近年も『人民日報』にしばしば登場するなど、今日の中国でも依然として大きな存在感を示して

いる。⁽⁵⁰⁾そこでの大同は、中国の歴史や伝統を意識しつつも、新たな意味づけを与えられていくことだろう。それがどのような展開をたどるのか、それを占う上で本稿の行ったような過去の経験を振り返ることに一定の意味があると思われる。

※本稿は、科学研究費補助金(17H02280・17K03123) および公益財団法人三菱財団・人文科学研究助成(二〇一七年度)による研究成果の一部である。

注(1) 竹内弘行『康有為と近代大同思想の研究』汲古書院、二〇〇八年、四頁。

(2) 竹内照夫『新釈漢文大系 礼記』(上) 明治書院、一九七二年、三二八頁。訳文を一部改めた箇所がある。

(3) 康有為の大同思想に関する研究は少なくないが、代表的な研究成果として以下の業績がある。蕭公權(汪榮祖訳)『康有為思想研究』聯経出版事業公司、一九八八年。竹内弘行『康有為と近代大同思想の研究』。湯志鈞『康有為の大同思想』『大同書』上海人民出版社、二〇一六年。

(4) 黄興濤『重塑中華——近代中国「中華民族」觀念研究』北京師範大学出版社、二〇一七年、第一章、四「尋婦「大同」——立憲運動与各民族平等融合的新自覚——以滿人官員和留日旗人的民族觀念為中心」。

(5) 嵯峨隆『清末における革命と伝統——アナキズムを中心に』『アジア研究』第三四卷第三号、一九八八年一月、四一—七二頁。

(6) 梁啓超『清代學術概論』上海古籍出版社、一九九八年、八〇—八二頁。

(7) なお、その結果として、あまり深い意味を帯びていない大同の使用例も見られるようになった。たとえば、民国初年に活躍したジャーナリストである黄遠庸は、「今日の中国の塩政の一つの重要な要点とは、各省一律に時期を区切ることはできず、次第に大同に進むよう求めるならばうまくいくことである」と述べている。「説塩」『黄遠生遺著』巻二、中国科学公司、一九三八年、二四三頁。これは塩政の処理に関する議論であるが、大同という用語が突然出現している。ここでの大同には深い意味はなく、単に理想の状態といった程度の意味であらう。

- (8) たとえば、大同の理想の指し示す内容が実際には茫漠としていたためにこそ、それが西洋で生じた社会主義と共鳴し、その理解に貢献したとの見解も示されている。楊国強『晚清的士人与世相』（増訂本）生活・読書・新知三聯書店、二〇一七年、『新文化運動——從「美国思想」到「俄国思想」】。
- (9) 吳義雄「孫中山与近代大同学說的終結」『中山大学学報論叢』一九九四年第一期、四六—五七頁。湯志鈞「孫中山和儒家大同学」『學術月刊』一九九七年第六期、八〇—八四頁。孫文の大同思想については、このほかにも多数の中国語の論文が発表されている。なお、次の二冊の著作は、広く中国近現代の大同思想を理解する上で多くを教えてくれる。竹内弘行『康有为と近代大同思想の研究』。許紀霖『家國天下——現代中国的個人、國家与世界認同』上海人民出版社、二〇一六年。
- (10) この点については、鄧野がつとに指摘している。鄧野『巴黎和会与北京政府的内外博奕』社会科学文献出版社、二〇一四年、二四—二七頁。本稿はこの指摘をさらに深めようとするものである。ただし、当時大きな存在感を示し、かつ国際協調論的大同思想と密接な関連を有する国際主義、世界主義、公理といった諸概念との関連については、それらの概念がやはり複雑な内実を備えているため本稿では踏み込むことはせず、今後の課題としたい。
- (11) 大戦参戦問題をめぐっては、次の業績を参照。小野寺史郎「中国ナショナリズムと第一次世界大戦」山室信一ほか編『現代の起点 第一次世界大戦 一 世界戦争』岩波書店、二〇一四年、一八七—一九二頁。味岡徹「中国の第一次世界対戦参加問題と国会解散」『軍事史学』第五〇巻第三・四号、二〇一五年三月、三八一—三九八頁。
- (12) 只眼（陳独秀）『每週評論』發刊詞。『每週評論』第一号、一九一八年一月二二日。
- (13) 只眼「随感錄 兩個和会都無用」『每週評論』第二〇号、一九一九年五月四日。
- (14) 只眼「随感錄 威大炮」『每週評論』第八号、一九一九年二月九日。
- (15) 只眼「山東問題与国民覚悟——对外对内兩種徹底的覚悟」『每週評論』第二三三号、一九一九年五月二六日。
- (16) 薩孟武「民族争闘及国家主義」『少年中国』第四卷第一〇期、一九二四年二月、一三頁。
- (17) 「欧戰議和之感想」『大公報』一九一八年一月一日。夏曉虹輯『飲冰室合集集外文』（中冊）北京大学出版社、二〇〇五年、七二九頁。ただし梁啓超が続けて、「外国人が共同で指導することも認めるのを妨げない」としながらも、「[中華民國が] 宗主権を保持し、[外蒙古やチベットに対する] 指導の地位を占める」と述べ、外蒙古やチベットに対

する「民族自治自決主義」が、限定的な性質を帯びていた点には注意が必要である。

(18) 「国際同盟与中国」『国民公報』一九一八年一月八日。夏曉虹輯『飲冰室合集集外文』（中冊）七四二—七四四頁。

(19) V. K. Wellington Koo, *China and the League of Nations*, George Allen and Unwin Ltd, 1919, pp. 1, 2, 5. なお、顧維鈞のパンフレットについては、次の研究に教えられた。Erez Manela, *The Wilsonian Moment*, Oxford University Press, p. 115.

(20) このパンフレットが、具体的にいつ執筆されたのかは明らかではない。顧維鈞は、一九一九年五月、ロンドンにおいて陸徵祥、王正廷とともに、*The League of Nations and China*と題する講演を行ったようである（*The Times*, May, 5, 1919）。このパンフレットは、この講演の際に話した内容と深く関連していると推測される。この講演を主催したのは、一九一八年一〇月にロンドンで設立された *The League of Nations Union* である。*The League of Nations Union* は、国際連盟の理念に協賛して結成して組織され、最盛期には世界各国に数十万人の会員を抱えた有力団体であった。後述するように、中国でもその支的の団体として、中国国際連盟同志会が結成されている。

(21) 王寵恵「国際連盟之意義与弁法」『時事新報』一九一九年二月一九日。なお、王寵恵は国際連盟を指すのに、本文中では「国際同盟」という語を用いている。

(22) 「国際連盟同志会縁起」『晨报』一九一九年二月一六日。この記事については、次の研究に教えられた。鄧野「巴黎和会与北京政府的内外博奕」二五頁。発足当時の中国国際連盟同志会については、次の研究に詳しい。土田哲夫「民間団体と外交——中国国際聯盟同志会の初期活動」平野健一郎ほか編『国際文化関係史研究』東京大学出版会、二〇一三年、四五四—四五五頁。

(23) 梁啓超「欧遊心影録（七十八）」『時事新報』一九二〇年六月一日。もちろん、連邦と国際連盟との間には様々な差異が存在する。最大の違いは、邦は主権を有していないのに対して、連盟を構成する各国には主権が認められている点である。こうした違いの存在については当時の中国の知識人も認識しており、たとえば国際連盟に関する包括的著作『国際連盟及其趨勢』（商務印書館、一九二二年）をまとめた呉品今は、連邦と国際連盟が異なる仕組みにより成り立っていること、すなわち前者は国家であるが、後者は国家ではなく「邦連」であって、それ自体では国家主権を保有し得ないことに注意を促している。しかし、それにもかかわらず、国際連盟を熱心に支持する呉品今は、最終的には「邦連」が連邦へといたるための段階であると捉え、将来の世界連邦実現に大きな期待を寄せてもいる（同書、上

巻、七五―八九頁)。こうした論理の下では、連邦と国際連盟の区別は実はそれほど大きな意味を有さないということになりそうである。なお、梁啓超は『国際連盟及其趨勢』に序文を寄せており、両者の違いの存在に気づいていた可能性があるが、この点に特に言及することはなく連邦と国際連盟の類似を強調するばかりである。

- (24) 連省自治運動については、次の諸研究を参照。胡春惠『民初的地方主義与連省自治』正中書局、一九八三年。李達嘉『民国初年的連省自治運動』弘文館出版社、一九八六年。塚本元『中国における国家建設の試み——湖南一九一九―一九二二年』東京大学出版会、一九九四年。

- (25) 『発刊詞』『改造』第三巻第一号、一九二〇年九月一日、六頁。なお、この文章は梁啓超の死後に公刊された著作集『飲冰室合集』（中華書局、一九三二年）にも収録されているが、標題は「解放与改造発刊詞」に変更され、文面にも相違が見られる（『飲冰室文集』三五、一九一二頁）。

- (26) 省憲法の大綱については、李国俊編『梁啓超著述系年』復旦大学出版社、一九八六年、一九八―一九九頁。連省自治運動への賛同については、丁文江・趙豊田編（島田虔次編訳）『梁啓超年譜長編』第四巻、岩波書店、二〇〇四年、三五一―三五五頁、を参照。

- (27) 劉迪『近代中国における連邦主義思想』成文堂、二〇〇九年、七―三三頁。

- (28) 梁啓超『中国立国大方針商榷書』共和建設討論会、一九二二年、七頁。

- (29) 独秀『連省自治与中国政象』『嚮導』第一期、一九二二年九月二三日。

- (30) 和森（蔡和森）『武力統一与連省自治——軍閥專政与軍閥割拠』『嚮導』第二期、一九二二年九月二〇日。

- (31) 一九二二年七月に上海で開催された中国共産党第二回大会を受けて作成された『中国共産党第二次全国大会宣言』では、「軍閥」の「割拠」が「連省自治」という美名で糊塗されていることが論難され、「割拠式」の連省自治への反対が唱えられている。中央檔案館編『中共中央文件選集』中共中央党校出版社、一九八九年、第一冊、一一〇―一一一頁。

- (32) たとえば、浙江省督軍で安徽派に属する盧永祥は運動への支持を表明したが、それは運動の理念に賛同したからというよりは、直隸派への対抗という実的要請のためになされたものだった。この点については、横山宏章『中華民国史——専制と民主の相剋』三一書房、一九九六年、六九―七〇頁。

- (33) 実庵（陳独秀）「大同主義与弱小民族」『嚮導週報』第六八期、一九二四年六月四日。
- (34) 東蓀（張東蓀）「國際改造」『時事新報』一九一九年五月二日。ただしこうした問題提起とは別に、大同の実現を支持しつつも、民族や愛国を説かず自主を得ていない民族は、大同主義を議論する余地をもたないとの主張も見られる。余家菊「民族性的教育与退款興学問題」『中華教育界』第二二卷第二期、一九二三年九月。大同という用語の多義性を、ここにも見て取ることができる。
- (35) 梁啓超「欧遊心影録（八十二）」『時事新報』一九二〇年六月二十七日。梁啓超はこの憤りを中国に書き送り、それが北京の日刊紙『晨报』に転載されて、五四運動の引き金を引くことになった。この点については、夏曉虹『閲読梁啓超』生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇六年、六一―六八頁。
- (36) 梁啓超「欧遊心影録（八十二）」『時事新報』一九二〇年七月一日。
- (37) 同上。
- (38) 本稿で言及した梁啓超、顧維鈞、王寵惠のほかにも、国際協調を提唱した人士は複数存在する。特に熱心であったのが、雑誌『太平洋』に集った人々である。彼らの過半はイギリス留学を経験し、またその多くが北京大学などの教授を務めていた。そして『太平洋』においても、大同が国際連盟と適合的であるとの指摘が見られる。皓白（皮宗石）「經濟上之万国連盟觀」『太平洋』第二卷第二号、一九一九年二月五日。『太平洋』に関する詳細については、拙稿「『太平洋』雑誌と和平の追求——五四前後における国内秩序論と国際秩序論」『中国哲学研究』第二四号、二〇〇九年一月、一二七―一四五頁。
- (39) 拙稿「五四時期廢除考試運動考」石川禎浩編『現代中国文化的深層構造』京都大学人文科学研究所、二〇一五年、一二二頁。
- (40) 詳細は、拙稿「五四時期廢除考試運動考」を参照。
- (41) 当該時期の朱謙之については、次の研究に詳しい。海青『『自殺時代』的來臨？——二十世紀早期中国知識群體的激烈行為和價值選択』中国人民大学出版社、二〇一〇年、第七章「朱謙之的『自殺』与『自我』」。森紀子「転換期における中国儒教運動」京都大学学術出版会、二〇〇五年、第七章「泰州学派の再発見——虚無主義から唯情主義へ」。
- (42) 朱謙之「虚無主義的哲学」『新中国』第一卷第八号、一九一九年二月一日。朱謙之によると、空間や組織が存在し

ている限り、国家や政府の影響力も存在する。したがって、国家や政府の根本的廃絶のためには、空間や組織の廃絶が求められる。無政府主義はそこまでは求めないという点で、虚無主義とは異なるとされる。虚無主義のさらなる詳細については、次の研究を参照。坂井洋史「近代中国のアナキズム批判——章炳麟と朱謙之をめぐって」『「橋論叢」第一〇一巻第三号、一九八九年三月、三七一—三九二頁。木下英司「朱謙之『革命哲学』について——アナーキーから虚無へ』『社会科学討究』第四〇巻第三号、一九九五年、八五—一一〇頁。

- (43) 「陸軍軍官学校訓詞」一九二四年六月一六日。この訓辭は、胡漢民、戴季陶、廖仲愷、邵元冲の手になるものである。また一九二九年一〇月に設置された中山記念碑には、「先生之道、天下為公。先生之志、世界大同」から始まる「総理像贊」が刻まれた。陳宇編『黄埔軍校年譜長編』華文出版社、二〇一四年、一九二四年六月一六日、一九二九年九月二六日の項をそれぞれ参照。なお周知のように、孫文自身も民生主義との関連など多くの場面で大同という語を使用しており、このことも黄埔軍官学校で大同が重視されるのに一役買ったことであろう。

- (44) これら三つの著作の内容については、次の研究を参照。竹内弘行『康有為と近代大同思想の研究』第三部第三章「国民革命と朱謙之の大同共産思想」。

- (45) 朱謙之『国民革命与世界大同』泰東図書局、一九二七年、六頁。

- (46) 小野寺史郎『国旗・国歌・国慶——ナショナリズムとシンボルの中国近代史』東京大学出版会、二〇一一年、第八章「党歌と国歌」。

- (47) 吳敬恒（吳稚暉）『三民主義為達到世界大同的途径』『安徽半月刊』第一〇期、一九三二年、六月一六日。

- (48) たとえば胡適は、満洲事変をしてエチオピア併合に国際連盟が有効に対処できないという状況にあっても、「この一七年の命脈を保ってきた国際連盟は、欧州戦争（第一次世界大戦）以降、国家間の集団安全保障（を実現する）唯一の機構である。世界の平和を愛好する無数の志士仁人の信頼と希望は、すべてこの機構の上に寄せられている。彼らは一度や二度の失敗を経たからといって、連盟が夭折することを軽々しく容認するものではない」と述べ、連盟を中心とする国際協調への支持を表明している。胡適『国運還可以抬頭』『独立評論』第二〇二号、一九三六年五月二四日、三頁。なお、胡適も大同に一再ならず言及したことで知られる。その意義については次の研究に詳しい。羅志田『再造文明之夢——胡適伝』（修訂本）社会科学文献出版社、二〇一五年、第五章「關懷——民族主義与世界主義」。

(49) 張益弘『到大同世界的真路』勝利出版社、一九四二年。薛祚光『論世界大同与促進政策』中央訓練團印刷所、一九四

八年。張益弘は国民政府軍事委員会西安辦公庁第四処秘書などを、薛祚光は国立政治大学訓練処副主任などを務めた人物である。したがって兩人はいずれも国民党と深い関係を有するが、国際連盟や国際連盟の枠組みの下での大同実現を目指していることも読み取れる。民国時期を代表する政治学者の一人、蕭公權による英文の著作にもそうした基調が見取れる。Kung-chuan Hsiao, *China's Contribution to World Peace*, Chungking: China Institute of Pacific Relations, 1945.

(50) 二〇一八年の場合、たとえば改革開放四〇周年関連の記事のなかで、中国が伝統的に世界の大同実現に尽力してきたと言及する例が見られる。「推動新變革、構建人類命運共同體（人民觀點）——邁向更高層次的「開放中國」④」『人民日報』二〇一八年一月八日。